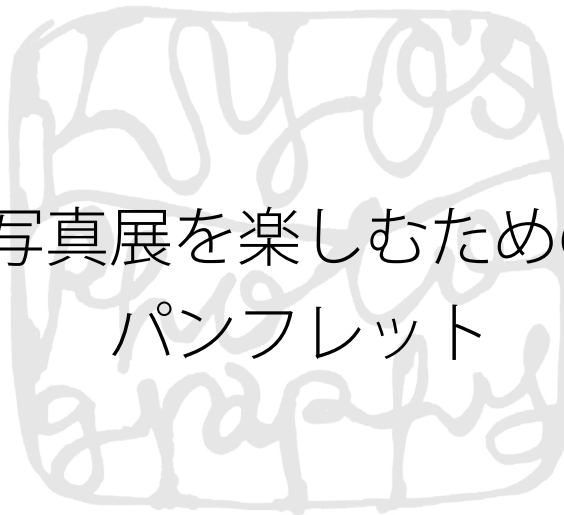


写真展を楽しむための
パンフレット



吉田恭写真展
“建築、装飾に見るフランスの美”
中世から近代、現代建築まで

開催期間：2019年6月22日～9月3日

開催場所：Coast Café 楽

住所：和歌山県日高郡日高町志賀 3820

<吉田恭プロフィール>

1956年生まれ/日高町比井出身/多摩美術大学卒業

1987年に青年海外協力隊（美術隊員）でパプア・ニューギニアに赴任、この経験がきっかけで、その後は美術とは懸け離れた政府開発援助分野に進む。主に大洋州、中近東、アフリカ地域で実施された様々な分野での技術協力プロジェクト運営の仕事に携わり、通算で約20年間の海外生活経験を持つ。その間、写真を独学で学びその表現方法を深める。2016年1月から地元に戻り、母校日高高校で非常勤講師（海外交流アドバイザー）を務める傍ら、地元や国内の美術館で写真を中心とした作品の発表を行っている。

<主な展覧会>

2014年 星めぐり写真展（日高川町 かわべ天文台/東山の森 Ark 主催）

2016年 文化仕掛けのオレンジ写真展（御坊市 夢空間ふわり/東山の森 Ark 主催）

2017年 八色の森美術展（新潟県南魚沼市 池田記念美術館）

2017年 星めぐり写真展（日高川町 かわべ天文台/東山の森 Ark 主催）

2018年 八色の森美術展（新潟県南魚沼市 池田記念美術館）

<写真展に寄せて>

この写真展では、“**建築、装飾に見るフランスの美**”というのがテーマで、フランスの建物の写真を展示しています。幸いにもフランスとは縁あってこれまで幾度となくフランスを訪問してきました。特にパリでは古いものから新しいものまで数多くの美しい建物があることに興味を持ちそれら建物の外観や内部装飾の写真を撮ってきました。

本年4月にノートルダム大聖堂が火災に遭い天井が崩落したというニュースを耳にしました。たまたま昨年この大聖堂天井ドームの写真を撮影していたので、貴重な崩落前の写真を地元日高の人にも見てもらいたいと思ったのがこの写真展の始まりです。

<連絡先>

kyoyoshida@icloud.com

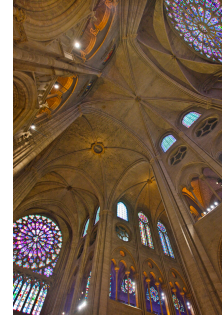
(前編)

ノートルダム大聖堂

Cathédrale Notre-Dame de Paris

所在地：6 Parvis Notre-Dame - Pl. Jean-Paul II, 75004 Paris

<展示写真> 火災による崩落前の天井ドーム



ノートルダム大聖堂はヨーロッパにゴシック建築様式を広めることとなった最初の建物です。このゴシックという名前の由来を探るとまた興味の尽きない深い歴史の魅力に引き込まれていきます。

ゴシック (Gothic) とは「ゴート風の」という形容詞ですが、さてこのゴートとは？と次の疑問が出てきます。ゴートとは、古代西ゴート王国の事で西暦 415 年から 711 年までの約 300 年間にわたり、現在のフランス南部からスペインにかけて存在していたゲルマン人系のキリスト教を国教とする王国でした。

この王国がイスラム勢力のウマイヤ朝に滅ぼされイスラム文明圏に飲み込まれてしまいます。

その後、この地の失地回復を目指してキリスト教勢力が反撃に出ますが、それが十字軍の動きにつながっていきます。十字軍の時代である 12 世紀のヨーロッパでは、当時世界でも最先端の技術を誇っていたイスラム文明の技術がヨーロッパに輸入されていきます。そしてヨーロッパでイスラムの建築技術を駆使して最初に建設された記念碑的な建物がノートルダム大聖堂で、ゴート調の建築、つまり本当はイスラム建築スタイルであります。ゴート風の建築 (ゴシック建築) と命名したのです。

ノートルダム大聖堂の建築は 12 世紀半ばに始まり、それから約 200 年にわたって築き上げられました。その後は数奇な運命をたどり、フランス革命 (1789 年) 時代には反王政を唱える勢力が、絶対王政の象徴でもある大聖堂への破壊活動と略奪を繰り返し完全に荒廃しました。その後長い間は放置されたようですが、老朽化もひどくなり崩壊が始まったので完全に破壊するべきという計画も上がったようです。

それを救ったのが、1804 年に皇帝に即位したナポレオン 1 世、そして大聖堂救済のため名著『ノートルダム・ド・パリ (ノートルダムのせむし男)』を 1831 年に出版したヴィクトル・ユーゴーでした。この小説のおかげで、それまでは権威のある人々の対象でしかなかった大聖堂が一般庶民にも広く親しまれるようになり、1845 年になり大掛かりな大聖堂の改修工事につながっていきます。この改修時に、新たに建物の屋根に尖塔が取り付けられました。それから、幸運にも第 2 次世界大戦の空襲からも逃れてきたのですが、今年 4 月に、いとも簡単に修復中の火の始末が原因とまで出火して大部分の天井と尖塔が焼け落ちてしまいました。



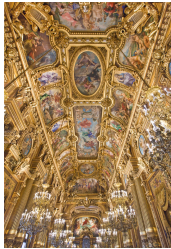
この尖塔を火災前のものに戻すか新しいものにするかの議論が現在持ち上がっています。そもそも 12 世紀に建てられた頃の技術は想像もつきません。その頃は今のような重機もなく人力で建てるしかありません。レーザーを駆使した精密な建設データによって復元できるといいますが、見た目には復元できても人力でやらなければ細部の技術は抜け落ち完全なる復元とはならないでしょう。

フランス政府は修復にあたり国際コンペを開くことにしました。すでに応募のデザインの中には“ガラス張りの尖塔”もあるようです。もう過去のノートルダム大聖堂にお目にかかることはできないと思いますので新しくなる姿に今後期待したいと思います。

ガルニエ宮大広間

Le Grand Foyer du Palais Garnier

所在地：Place de l'Opéra, 75009 Paris



ガルニエ宮は通称パリ・オペラ座と呼ばれており、1875年に完成しています。設計者であるシャルル・ガルニエからその名前が付けられました。大階段、大広間、図書館、劇場等、建築と芸術の双方で非常に価値の高いパリ文化を代表する建物の傑作であると言われています。1989年に、ガルニエから4kmほど南東のバスチーユに新オペラ座ができました。それ以降は、主にガルニエではバレエ、バスチーユでオペラ公演が行われています。写真はガルニエ宮の大広間で、高さ18m、長さ58m、幅13mほどの大きさです。ここは、貴族や資産家の社交場としてデザインされた休憩室だそうです。一瞬、

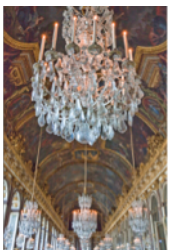
ベルサイユ宮殿の“鏡の間”と見間違いそうになるほど豪華絢爛な天井装飾で、窓や鏡を効果的に使い広々とした空間を演出しています。

上流階級の話から一変して現代の世俗的な話に移ります。ここガルニエ宮の近くにプチ・シャン通り（Rue des Petits Champs）という名前の通りがあります。この通りには和食のスーパーをはじめ、ラーメン屋、寿司屋など日本食レストランがたくさん立ち並んでいます。最近では、とうとうオニギリ専門店まで出来てしまいフランス人が店内でオニギリを食べている姿を目にします。ガルニエ宮というパリ文化を代表する場所でオニギリがじわじわとフランス文化を占領し始めているのです。高野山のお坊さんに聞いた話ですが、最近では高野山を訪れる外国人観光客ではフランス人が一番多いということです。はて、これらの現象を一体どのように説明すればよろしいのでしょうか？パリの文化は今後益々、外側からではなく、内側から日本化していくのでしょうか？

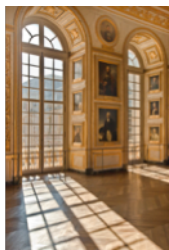
ベルサイユ宮殿

Château de Versailles

所在地：Place d'Armes, 78000 Versailles, France



(写真1)



(写真2)

フランスを代表し、ヨーロッパ中で最も美しいと言われているあまりにも有名な宮殿です。1682年に、フランス王ルイ14世が、パリのルブル城から南西へ22km離れたこの地、ベルサイユにお城を移しました。王が絶対的な権力を行使する政治形態である絶対王政（絶対君主制）の象徴的建造物として約100年の間この地において栄華を誇りました。しかしこの絶対王政も、贅沢と浪費に浸る王族や上流貴族の生活と対照的に貧困と食糧不足にあえぐ民衆の不満の爆発により1789年

のフランス革命を引き起こし、ルイ16世とマリーアントワネット王妃のギロチンによる処刑を以って終止符を打つことになったのです。

この宮殿の建築様式は1590年頃から盛んになったバロック建築です。その特徴は、建築そのものだけではなく、彫刻や絵画などを含めた様々な芸術手法を凝らした物によって空間を構成し多様性のある建築を生んでいます。天井画や、壁の絵、家具やシャンデリアなどもその建築様式を支えています。

そして、ベルサイユ宮殿では何と言っても“鏡の間”（写真1）が有名です。長さ約75m、幅10m、高さが12mの規模を持つこの空間は、大きな窓から外部の光を取り入れ、その反対側の壁には鏡が埋め込まれています。この“鏡の間”は、実は観光客で芋洗いの状況でした。フロアを進む人の頭が写真の下部に入らないようギリギリとところでカットしています。さらに進んでいくと進入禁止のロープが張られた広間もあり、そこは人影もなく、嘘のように静かで光が降り注ぐ美しい床の空間が広がっていました（写真2）。